医療的ケアの、ある現状に愕然…

養護学校等における医療的ケアの現状について、ある県のある母親の次のような意見が、メル友から情報提供がありました。

【私の子供が通う養護学校では、遠く離れたケア室に外の廊下を通り（夏は熱く、冬は寒く風の吹く中）何度も吸引の為に連れて行かれるのです。子供は授業を中断し、孤独を感じながらも寂しく教室を後にするのです。昼の注入も同じです。一時期、教室を出た時やケア室の前に来て泣き出す事がありました。我が校の看護師は自ら子供達の所には出向きません。

ケアがスタートする時にケアは教室でとお願いしましたが、要望は認められませんでした。もう一つ納得できないのは、看護師と親の申し送りが無い事です。紙面上のやり取りだけです。子供のケアを顔の見えない方におまかせするのに、疑問を感じている日々です。何度か学校側にお願いしましたが、改善される事はありません。とても厚い壁を感じます。

しかし、あきらめる事無く学校側に歩み寄っていく努力を惜しまず、子供に良い環境を提供できる手助けをして行きたいと思います。】

養護学校等における医療的ケアについては、各県でもかなり検討されている情報もあり、全国的にかなり進捗しているものと思っていました。私も関心あることなので、当ＨＰでしばしばこの問題について記載してきました。

それだけに、前記のような相変わらずの現状を知ると、全国的にはごく一部の学校のことだろうと思いつつもその学校全体としての取り組みなだけに、現在の教育界の障害児観の一端を見るようで、愕然としてしまう。

医療的ケアを必要とする「その子どもの教育活動」とは何かの検討が疎かにされ、単に医療的ケアの言葉だけでの体制作りが優先では、こうした事例のようなことが起こりうることを、危惧していました。

なぜ、「教育を必要としているのは、その子ども」という原則に立って、連携のあり方を検討し合わないのでしょうかね。なぜ、教育環境作りを、親が先に気苦労しないといけないのでしょうかね。私には、不思議でなりません。

（2004 年 05 月 14 日　記）